

2014年度 博士学位論文審査資料

No. 1

提出期限：2014年12月10日（水）17：00厳守

日本言語文化 専攻	氏名	藤山 益美	学生 番号	B14001
論文題目	『雨月物語』考 —「浅茅が宿」「吉備津の釜」「蛇性の姪」を中心として—			
要 旨（2000字） <u>学生が記入</u> （ワープロで清書してください。）				
<p>『雨月物語』の中で「浅茅が宿」「吉備津の釜」「蛇性の姪」を中心にし、その中でも特に女性主人公の性格設定やその設定に関連した事項を考察の中心とした。彼らはそれぞれ何らかのメッセージを伝える役割を持って登場している。それでもあえて主人公的立場であるのは男性なのか、女性なのか、という点に注目した。その過程の中で『雨月物語』における主な登場人物、特に女性主人公に関する評価の中で「妬婦に対する評価」もしくは「妬婦に対する扱い」など、女性の凄惨さや妻としての規範意識から離れた女性の言動が注目されてきた。「妬婦」はやっかいなものであるような評価であったが、果たしてそれは真実なのか。本作では女性は個別の名称を与えられ、出自や性格設定が細かく明確化され、話題展開の一端を担っている。もはや男性登場人物のみが主人公ではなく、女性登場人物もそれぞれに活躍し、展開への影響が高い。むしろその女性たちの積極的な動きで話題は展開しているように感じる。注目した三作品はそれぞれ性格設定が異なる女性が登場し、比較的良好な設定傾向にある男性たちの結末が描かれた作品である。「吉備津の釜」冒頭部分には妬婦譚が書かれている。内容は男性側への注意喚起である。しかし注意喚起にとどまらず「婦を制するは其夫の雄としきにあり」とは男性に「雄々しくあれ」との提言であるとも言える。作品内容は女性の持つ「慳しき性」をコントロールできなかったことによる話題展開が認められる。しかし、「慳しき性」で「性」であるとするのなら、この「慳しき性」が起因の話題展開は仕方のないものであると言える。しかしその評価はあまりに女性に対して一方的なものではないか。男性目線による評価であると言わざるを得ない。しかし、このような女性に対する評価がなされるのは「家父長制度」が日本社会に形成されていたからであろう。「性」のまがまがしさを主張するだけのものでは決してない。もちろん男性の「性」を批判するものでもない。伝統的規範意識に支配された時代において、自らの力で「自由と承認の葛藤」の支配を打ち破り、本当の自分を手に入れた人間の本質が描かれた作品であると言える。</p> <p>第一章では「浅茅が宿」に注目した。勝四郎と宮木という一組の夫婦が「家父長制度」の元に婚姻関係を結び、夫の出奔により妻はひたすら「待つ女」となる。夫は約束を違え、妻は夫の帰りを待つ中で絶命する。「浅茅が宿」には典型的な「規範意識に忠実」であるがゆえに個性的な性格設定をされていない女性主人公が存在し、他二作品には見られない「戦争」というキーワードが存在している。自主性が</p>				

ないために受け身としての「戦争」が彼らの運命を左右したと考え、考察している。次に作中存在する「境界線」について考察した。勝四郎を「異邦者」とすることで真間の郷の異界性や境界性と登場人物の扱いとの関連について考察した。神聖な古来伝承と結び付けることにより、読者に共感を求め、より宮木の清廉さが際立ち、自然な結末になるように設定されている。

第二章では「吉備津の釜」に注目した。正太郎と磯良という一組の夫婦が初めから不穏調和で婚姻関係を結ぶ。磯良の持つ本来の神聖さと凶暴性との関連、またそれらと伝統的規範意識との関連を考察した。未熟な「居場所を見つけられない者」の存在理由がないという欲求不満は解決方法を教授されていないために「暴力」という、非常に簡単で自分の力を顕示できる形で表面化したのではないかと考えている。次にこの神聖さに関連して「怨み」「恨み」について主に考察した。作中、明確さを持たないがゆえに「想い」は暴走し、単なる個人的怨恨での「凄惨さ」ではないと考える。魂の開放の形式は「規範」から逃れたいためではなく、どちらかという本来の自分を取り戻すという表現の解釈がふさわしいのであろう。

第三章では「蛇性の姪」に注目した。豊雄と真女兒は最後まで三作品の中では唯一、婚姻関係を結ばない関係である。この「蛇性」における凄まじさについては「道成寺伝承」などを元に考察した。中でも特に、この「三輪山伝承」は「神婚説話」と呼ばれるものにあたり、その接收について考察した。また「復活・蘇生」のモチーフは「説経節おぐり」「安鎮・清姫伝承」を中心にし、真女兒が大蛇へと変身した過程についての関連性について考察した。「籠もる」とは本来、何をするために「籠もる」のか。籠もっていた間に女は「生まれ変わった」のだろう。「蘇生」し、「復活」したことで女の持つ本質に近い存在となり、当時の女性には皆無だった「自由」と「自主性」を手に入れ、大胆にも行動に移せるようになったのではないか。伝統的な規範意識の中で女性は本来の性質を表に出すことはほとんどなかった。「籠もる」ことで、「蛇性」に「変身」することで「自由な意思」を手に入れた女性は「自分自身の解放」を手に入れたのではないかと考える。